鹿島町井田堂坂遺跡

国道159号井田歩道工事に係る
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1986

石川県立埋蔵文化財センター

井田堂坂遺跡縄文土器出土状況

鹿島町井田堂坂遺跡

国道159号井田歩道工事に係る
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1986

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1　本報告書は石川県鹿島郡鹿島町井田地内に所在する井田堂坂（いだどうさか）遺跡・井田テラガイ遺跡の緊急発掘調査報告書で、従来の井田中世遺跡（県遺跡番号2652）とは別個の遺跡として把握できたので、変更している。

2　本遺跡は国道159号鹿島町井田地内の歩道工事に係るもので、建設省北陸地方建設局金沢工事事務所の委託を受けて、石川県立埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。

3　本遺跡の分布範囲確認調査は、昭和60年５月26日に実施し、本調査は同年10月16日から12月５日まで行った。調査担当は、平田天秋、米沢義光、越坂一也、西野秀和である。

4　調査の実施にあたっては、建設省金沢工事事務所、同津幡出張所、鹿島町教育委員会、七尾市シルバー人材センター、㈱在沢組の助言、協力を受けた。

5　本報告書の執筆・編集は西野があたった。

6　本遺跡の遺構、遺物実測図、写真、出土遺物等の資料は、当センターにて一括して保存管理にあたっている。

7　本報告書の遺構、遺物挿図、写真図版の指示は次の通りであるが、適宜変更したものについては、挿図に明示した。

(1)　方位は全て磁北を表示する。

(2)　水平基準は海抜高で表示する（単位　m）。

(3)　遺物拓影・実測図は３分の１の縮小である。

(4)　写真図版中の遺物の縮尺は統一してはいない。

(5)　写真図版中の遺物番号は、挿図に使用した番号と同じである。

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境……1
Ⅱ　調査に至る経緯と経過……7
Ⅲ　層序と遺構……10
　1　井田堂坂遺跡、2　井田テラガイ遺跡
Ⅳ　出土遺物……17
　1　井田堂坂遺跡、2　井田テラガイ遺跡
Ⅴ　まとめ……24

挿図目次

第1図　鹿島町の位置図……1
第2図　周辺の遺跡（1/25,000）……2
第3図　井田古墳群と調査地点（s＝1/1,000）……5
第4図　井田堂坂遺跡調査地点（s＝1/10,000）……10
第5図　調査区平面図（s＝1/200）……11
第6図　土層断面図（s＝1/80）……11
第7図　縄文土器出土地点土層図（s＝1/80）……12
第8図　井田テラガイ遺跡調査地点（s＝1/1,000）……14
第9図　調査区平面図（s＝1/80）……15
第10図　土層断面図（s＝1/80）……16
第11図　井田堂坂遺跡出土土器（1/3）……18
第12図　井田堂坂遺跡出土土器（1/3）……19
第13図　井田テラガイ遺跡出土土器（1/3）……22

表　目　次

第1表　周辺の遺跡地名表……3

図版目次

図版1　航空写真（調査地点）s＝1/8,000、昭和57年8月13日、セントラル航業撮影
図版2　井田堂坂遺跡遠景、発掘区近景
図版3　表土除去作業風景、上層部の調査風景
図版4　上層部の完掘状況、上層部土層断面
図版5　下層部の掘り下げ、下層部の発掘状況

図版 6　下層部の土器出土状況、下層部の一括土器

図版 7　井田テラガイ遺跡近景、南側のピット出土状況

図版 8　北側のピット出土状況、調査区全景

図版 9　井田堂坂遺跡出土土器（8 を除いて1/3）

図版10　井田堂坂・テラガイ遺跡出土土器（1/3）

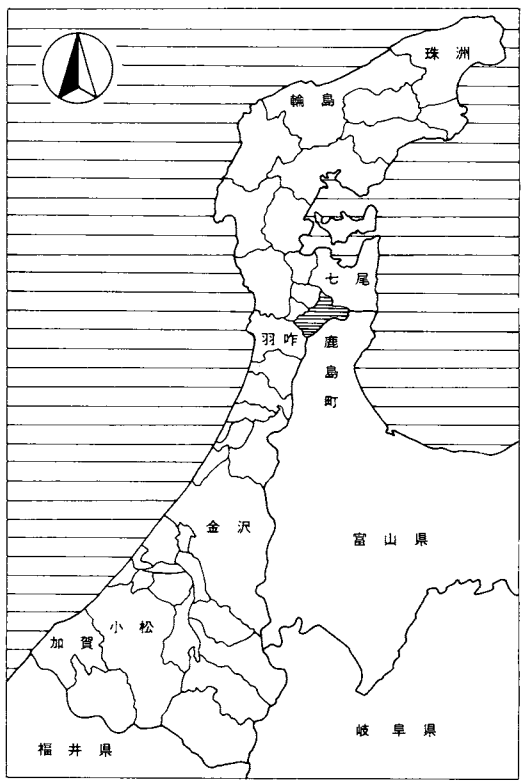
Ⅰ　遺跡の位置と環境

井田堂坂遺跡、井田テラガイ遺跡は、日本海に突出する能登半島の中央部、石川県鹿島郡鹿島町井田地内に所在する、縄文時代中期後半、晩期中葉、弥生時代後葉、平安時代、中世にわたる複合遺跡である。

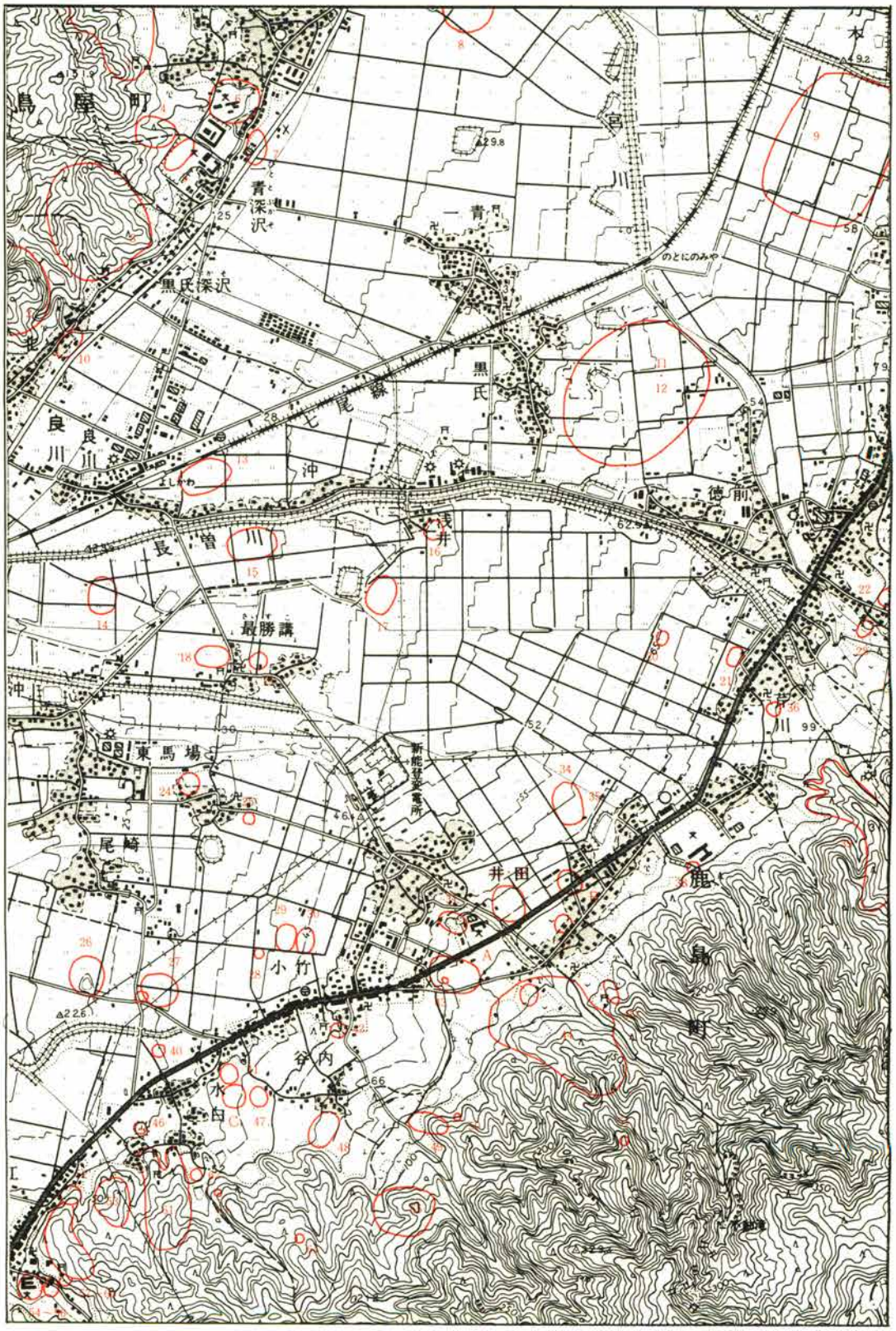
鹿島町の東部は、南北に走る石動山塊（標高565m）を越えて、七尾市、富山県氷見市と境を接し、南部は石動山系の碁石ケ峰をはさんで羽咋市、富山県氷見市、北西部は新第三紀～第四紀更新世前期にかけて形成された幅約２～３km、長さ約20kmの邑知地溝帯の低地帯をはさんで、鳥屋町、鹿西町に接する。町域全体で見れば、南東地区は石動山系の丘陵部と北西地区の低地帯とに大別され、低地帯に向かうゆるやかな傾斜面に集落が、山麓線に沿い北東方向に連なるように営まれている。北西部の邑知地溝帯にむけて、急峻な石動山系を縫うように二宮川、長曽川、井田川、熊野川、久江川、地獄谷川が流れ出て、それぞれが地溝帯に小扇状地形を形成している。これらの河川のなかで二宮川が、地溝帯を北上し、田鶴浜町にぬける低地帯を流路として流れてゆく。二宮川流域は県下で最大規模の古墳密集地域で、地溝帯中心地域を含めると総数800基を越えている。集落は小扇状地扇央部に立地し、国道159号線が山麓線を北東方向に路村的集落をつないで、町域を斜断してゆく。面積47.9km²、人口10,000人強の農林業および機業を主産業とする町である。

井田堂坂遺跡、井田テラガイ遺跡は、熊野川が形成した小扇状地形のなかにあり、前者は比較的傾斜がつよい地区にあたり、後者は山麓斜面のなかにあると言える。前者は標高約70m、後者は約80mに位置していて、ともに、邑知地溝帯をのぞみ展望はきわめて良好である。特に井田堂坂遺跡は、背後の堂塚古墳から見ると羽咋方向にまで遠望がきく。井田堂坂遺跡の遺物包含層は砂層、礫層の間にあり、急峻な山系を流れる川の氾濫原の様相をうかがう事ができる。

鹿島町の縄文時代の遺跡は、本報告を含めて15ケ所を数えるものの、石器単独出土地が６ケ所を数え、集落址の実相を把握できる遺跡は少いと言わざるを得ない。近年は邑知地溝帯とその周辺部で開発事業にかかる遺跡の発見があいつぎ、鳥屋町若狭見地内で津田耕吉氏（石川考古学研究会員）によって、数片ではあるが楕円押型文土器が発見され、能登地域では画期的な事



第１図　鹿島町の位置



「能登二宮」

第2図　周辺の遺跡

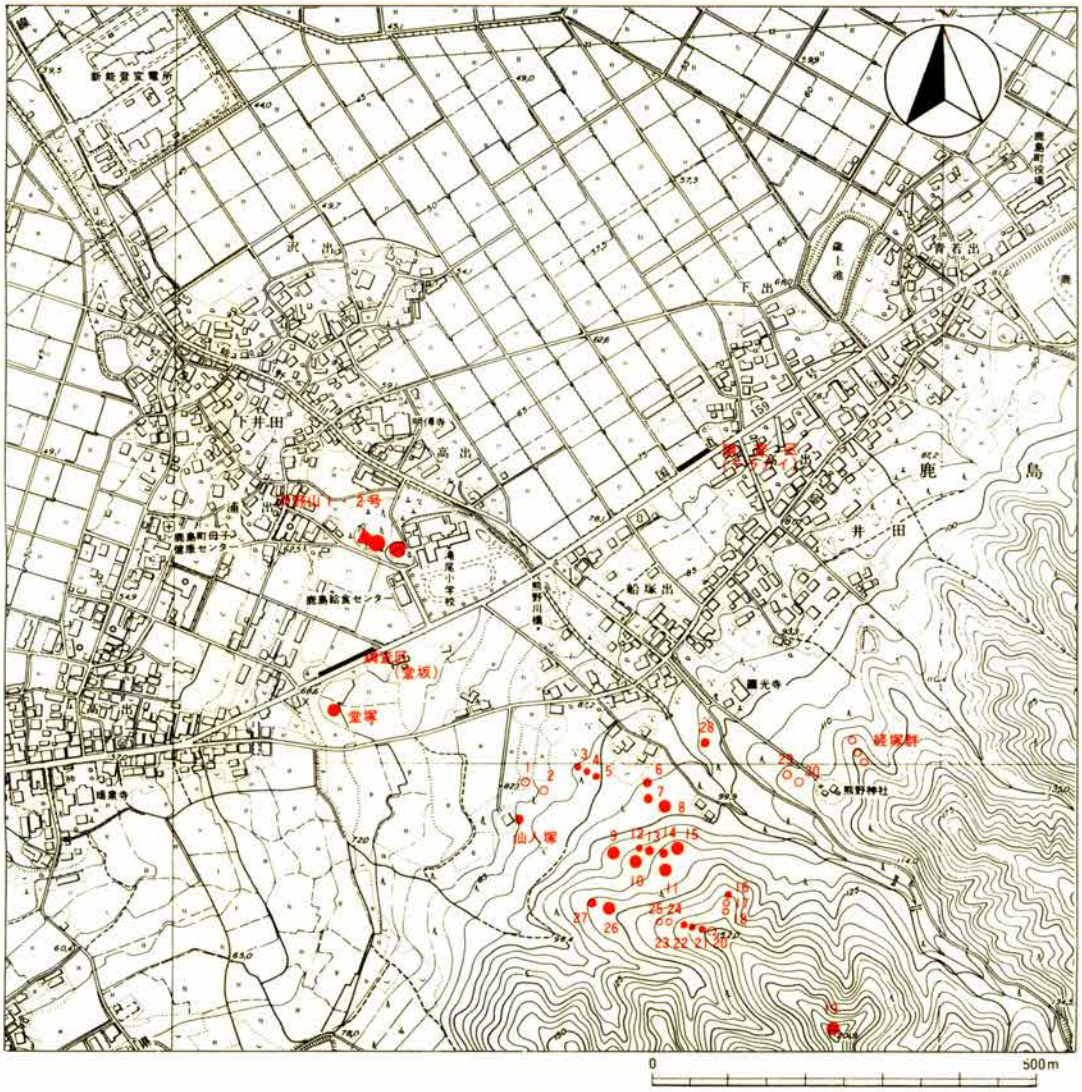
第１表　周辺の遺跡地名表（「石川県遺跡地図」に拠る）

番号	県番号	名　　称	所在地（通称）	種　別	現　況	時代	備　　考
1	2707	末坂１～８号窯跡	鳥屋町末坂	窯　跡	山裾・山林	平安	
2	6598	良川北古墳群	〃　良川	古　墳	山陵・山林	古墳	34基構成
3	6599	黒氏深沢古墳群	〃　黒氏深沢	〃	〃　〃	〃	29基　〃
4	2703	深沢１～４号窯跡	〃　一青（深沢）	窯　跡	山裾・山林	〃	昭和48年調査
5	2701	深沢中学校庭窯跡	〃　〃	〃	〃　校地	不詳	消滅
6	2711	鳥屋小学校遺跡	〃　末坂	包含地	丘陵・畑地	〃	土師器（高坏）
7	2702	深沢遺跡	〃　一青	〃	〃　体育館	〃	須恵器・仏像
8	2713	手間神社遺跡	〃　羽坂	〃	〃　山林	平安	土師・須恵器
9	6244	武部ショウブダ遺跡	鹿島町武部（ショウブダ）	〃	平地・水田	〃	昭和58・59年調査
10	——	良川遺跡	鳥屋町良川	〃	〃・〃	〃	須恵器
11	2670	徳前Ｃ遺跡	鹿島町徳前	〃	〃・〃	縄文	昭和54・56年調査
12	2700	〃	鳥屋町黒氏（サクラマツイケ）	〃	〃・池水	古墳	木器・土師器
13	2699	良川遺跡	〃　良川	〃	〃・水田	不詳	土師器
14	2698	免田中世城遺跡	〃　〃	〃	〃・〃	中世	珠洲焼・五輪塔
15	6246	良川沖遺跡	〃　〃	〃	〃・〃	〃	古銭・珠洲焼
16	2657	浅井遺跡	鹿島町浅井	〃	扇端部・〃	古墳	
17	2656	合城跡	〃　最勝講（ガシロ、ガンショウ）	城　跡	平地・〃	不詳	
18	2654	最勝講土師遺跡	〃　〃	包含地	〃・〃	古墳	台付壺、高坏
19	2655	〃　古瀬戸遺跡	〃　〃	〃	〃・〃	鎌倉	古瀬戸
20	2658	芹川土馬遺跡	〃　芹川（ハネ）	〃	扇頂部・〃	平安	陶馬
21	2660	〃　母田遺跡	〃　〃（母田）	〃	〃・〃	古墳	土師器壺・器台
22	2673	二宮川遺跡	〃　二宮（二宮川すじ）	〃	〃・畑地	縄文	磨製石斧、地点不詳
23	2676	二宮土馬遺跡	〃　〃	〃	〃・〃	平安	陶馬
24	2653	窪田館跡	〃　東馬場	館　跡	平地・宅地	不詳	
25	6595	井田中屋垣内遺跡	〃　井田（中屋垣内）	包含地	〃・水田	中世	蔵骨器
26	2629	水白Ａ遺跡	〃　水白（ニホンギ）	〃	〃・〃	古墳	高坏脚部
27	2643	小竹神社跡	〃　小竹（フルツノミヤ）	社　跡	〃・〃	不詳	
28	2641	〃　経塚	〃　〃	経　塚	台地端・〃	中世	耕地整理により消滅
29	2635	〃　Ａ遺跡	〃　〃	包含地	平地・水田	古墳	高坏・坩・壺
30	2636	〃　Ｂ遺跡	〃　〃	〃	〃・〃	〃	甕・高坏
31	6593	井田岡野山古墳群	〃　井田（岡野山）	古　墳	丘陵・墓地	〃	前方後円墳、円墳
32	2652	〃　中世遺跡	〃　〃	墳　墓	山麓・水田	中世	板碑・灯明皿
33	2645	〃　Ａ遺跡	〃　〃	包含地	平地・水田	〃	〃・〃
34	2644	〃　遺跡	〃　〃	〃	〃・〃	縄文	石斧、地点不詳
35	2649	〃　江塚古墳	〃　〃（江塚）	古　墳	〃・〃	古墳	巨石数個があった。
36	2661	芹川花畠遺跡	〃　芹川（花畠）	包含地	扇頂部・宅地	中世	珠洲焼
37	2646	井田Ｂ遺跡	〃　井田（神田）	〃	平地・水田	古墳	壺・甕・高坏
38	2648	〃　鹿島中学校遺跡	〃　〃	〃	校　地	〃	須恵器（提瓶）
39	2663	勝山城跡	〃　芹川（芹川城山）	城　跡	山腹・山林	不詳	水瓶
40	2631	水白Ｃ遺跡	〃　水白	包含地	丘陵端・宅地	縄文	磨製石斧
41	2636	小竹Ｂ遺跡	〃　小竹	〃	平地・水田	不詳	
42	2634	〃　遺跡	〃　〃	〃	〃・宅地	縄文	石鏃、磨製石斧
43	2650	井田堂坂古墳	〃　井田（堂坂）	古　墳	台地端・水田	古墳	
44	2647	〃　Ｃ遺跡	〃　〃（船塚出）	包含地	台地・水田	〃	
45	6594	〃　熊野神社経塚群	〃　〃	経　塚	尾根・山林	中世	珠洲焼、５基以上
46	2633	水白鍋山古墳	〃　水白（ナベ山）	古　墳	丘陵端・雑地	古墳	方格規矩鏡

47	2638	小竹がらぼう山古墳	鹿島町小竹（ガラボウ山）	古　墳	丘陵端・雑地	古墳	前方後円墳
48	6588	〃 シャミドウ遺跡	〃　〃（シャミドウ）	包含地	平地・水田	平安	柱根
49	6589	〃 谷内山古墳群	〃　〃（谷内山）	古　墳	丘陵・雑地	古墳	円墳３基
50	2640	〃 の陣の穴	〃　〃（　〃　）	〃	〃・山林	〃	
51	6592	井田古墳群	〃　井田	〃	山腹・〃	〃	円墳約30基
52	2628	道閑刑場跡	〃　久江	刑場跡	丘陵・〃	江戸	
53	6587	久江ウシロタン古墳群	〃　久江・水白（ウシロタン）	古　墳	〃・〃	古墳	円墳９基
54	2620	久江Ａ遺跡	〃　久江	包含地	段丘・校地	縄文	磨製石斧
55	2622	〃 Ｃ 〃	〃　〃	〃	〃・〃	平安	
56	2623	〃 Ｄ 〃	〃　〃	〃	〃・〃	鎌倉	浄瓶（珠洲焼）
57	2619	〃 遺跡	〃　〃	〃	〃・水田	平安	瓶・壺
58	2621	〃 Ｂ遺跡	〃　〃	〃	段丘・畑地	縄文	磨製石斧
59	6239	〃 ウシロヤマ古墳群	〃　〃（ウシロヤマ）	古　墳	尾　根	古墳	古墳８基
60	2627	麻が獄堡跡	〃　〃	堡　跡	丘陵・山林	室町	
61	6240	水白ミヤヤマ古墳群	〃　水白（ミヤヤマ）	古　墳	〃・〃	古墳	約40基
62	6590	〃 荻の谷遺跡	〃　〃（荻の谷）	包含地	平地・水田	平安	土師器、須恵器
63	2632	〃 横穴	〃　〃（陣の穴）	古　墳	丘陵・山林	古墳	
64	2639	小竹 〃	〃　小竹（乱の穴）	〃	〃・〃	〃	
65	2642	小竹城	〃　〃（八ケ平）	城　跡	山麓・〃	不詳	
A	——	井田堂坂遺跡	〃　井田（堂坂）	包含地	〃・水田	縄文	当報告
B	——	井田テラガイ遺跡	〃　〃（テラガイ）	〃	〃・畑地	〃	〃
C	——	小竹平遺跡	〃　小竹	〃	〃・水田	弥生	

例と言えるが、遺跡立地や包含層の状況に不明の点が多く、今後の課題である。前期段階では、田鶴浜町の丘陵内の狭小な谷地形のなかにある野寺遺跡の調査が、穴水町甲・小寺遺跡、能登島町佐波遺跡と並ぶ貴重な資料の発見となった。県下においては、時期的に限定された遺跡としてだけではなく、平地から遠く離れ低丘陵内での立地は、遺跡発見に大きな困難が予想される丘陵をも注意を払う必要性を認識させるものであり、低地帯の厚い堆積層下の遺跡の発見のあいつぐ事例（中島町大杉谷内遺跡、能都町真脇遺跡）と共に、県下における縄文時代研究に大きな見直しをせまるものとして評価されねばならない。邑知地溝帯では、砂丘上に立地する羽咋市寺家遺跡から、前期中葉の北白川下層式に併行する爪形文土器が出土し、日本海側における縄文海進、海退を考えてゆく上での重要な発見がある。また、羽咋市四柳貝塚は中期前葉から後葉にかけて形成された地溝帯では唯一の淡（汽）水性貝塚で、邑知入江から邑知潟への変化を示し、地溝帯の環境復元に大きな位置を占めている。

さて、鹿島町では、藤井遺跡が昭和40（1965）年に小試掘調査が実施され、中期古府式期から後期前田式期にかけての遺物が得られ、串田新式期に盛期を向かえた集落として把握されている。県下では最高所に立地している福田原山遺跡は、石動山系の標高約320m に立地し、中期新保式期から後期前田式期にいたる集落である事が、昭和40（1965）年、同55～58（1980～83）年にかけての５次にわたる発掘調査で判明してきた。面積は約3,000m² の規模であるが、出土遺物はごく少量にとどまり、土器型式の間に抜け落ちているのが目立ち、断続的な居住や集団の小さい事に由来するとの推定が提示されている。また、石動山系の山頂およびその近辺では、福田原山遺跡と



第３図　井田古墳群と調査地点（S＝1/10,000）

類似する平坦地が多く知られている。蟻ケ原・芹川原山、井田原山、小竹原山、久江原山、小田中原山、高畠原山等が連なり、遺跡立地の可能性が指摘されている。一方、邑知地溝帯の旧扇状地の徳前Ｃ遺跡では、国道159号鹿島バイパス関連の調査が、昭和52（1977）年から４次にわたって実施され、第３次調査時（調査担当、米沢義光氏）に弥生時代後期の包含層の下位から、縄文前期末から中期前半の良好な包含層が検出された。扇状地扇央部（標高約46m）の度重なる氾濫は、おおむね近世前期（17世紀以降）に比定され、奈良時代の集落を含めて遊水地的な地勢のなかにあり、比較的ゆるやかな堆積層位となっているのが判明している。遺構としては、焼土痕、土坑、ピット等が見られ、遺物量から鑑みて拠点的な集落址と想定される。現地表下1.5～2.0m の深さに、縄文時代の包含層が発見された事は、地溝帯を含めて沖積平地の遺跡保護に、大きな課題を提示したと言える。鹿島町では後・晩期の遺跡の報告はなく、本遺跡が初例である。山麓近くの

厚い堆積層下にも慎重な対処がなされなければならない事が、時代ごとに変化する遺跡立地を含めて考えていかねばならないと言える。

弥生時代中期に所属する集落の発見は、鹿島町では現在までのところ知られてはいない。地溝帯周辺では、西南端の旧邑知潟に臨んだ羽咋市吉崎・次場遺跡が、古墳時代まで継続する長期の集落址で、径400mあまりの半円形の範囲にひろがる北陸有数の集落址として知られている。また、地溝帯の北東端、七尾市細口源田山遺跡では中期から後期にかけてつくられた方形周溝墓群があり、古墳時代への萌芽を推定させるもので、北陸では最古の方形周溝墓として貴重なものである。昭和59（1984）年に調査された七尾市小島六十刈遺跡は、前期にまでさか上る数少い時代の遺跡であった。該期の遺跡は紫山出村遺跡で特徴づけられるように、低湿地での発見が目立ち、小島三十刈遺跡のように標高約30mの丘陵上の立地は注目を集めた。本遺跡の調査で、わずか1片だけではあるが中期後半代に位置づけられる土器が得られ、旧扇状地形の厚い堆積層下には、県下で有数の古墳群を成立させる基盤となった揺籃期の集落址が埋もれていると考えられる。

弥生時代後期後半から古墳時代前期の集落址は、徳前C遺跡の調査が上げられるのみで、他は採集遺物からの想定である。浅井遺跡、最勝講土師遺跡、小竹A・B遺跡等が知られ、古墳時代後期に位置づけられる水白A・B遺跡が、昭和60（1985）年に発掘調査が実施されている。

邑知地溝帯を中心として総数800基を越える古墳が、昭和51年から実施された分布調査によって明らかにされ、二宮川流域を含めて平地に臨む丘陵上には、ほとんど例外なく古墳が立地する状況を呈してきた。能登地域の古墳時代の消長が集約する状勢のなかで、前方後方墳である七尾市尼塚1・2号墳の調査、院内勅使塚の整備、帆立貝式前方後円墳と確認された水白鍋山古墳、全長48mの前方後円墳と判明した小竹ガラボ山古墳の確認調査が進展してきて、鹿島町での首長墓系列が、小田中亀塚古墳から5世紀中葉に比定される小竹ガラボウ山古墳へと、わずかながら北上してゆく傾向が認められている。総数で800基を越える古墳から見通せる時代は、七尾市、羽咋市、鳥屋町、鹿西町、田鶴浜町、鹿島町の各地域圏が錯綜する状態であり、今後の大きな研究課題であろう。

奈良・平安時代に属する遺跡の発掘は、鹿島バイパスに関連する徳前C遺跡、武部ショウブダ遺跡で実施されている。徳前C遺跡は奈良時代前期の集落で、掘立柱建物跡8棟、井戸跡1基等が検出され、拠点的な集落の一部と想定されている。武部ショウブダ遺跡でも数棟の掘立柱建物跡の発見が知られている。また、小竹遺跡では、圃場整備事業に伴うトレンチ調査が、鹿島町教育委員会によって行われている。調査の性格上、遺構の把握はできなかったものの、多数の溝状遺構やピットが検出され、古墳時代、奈良時代の土器が得られている。

参　照　文　献

鹿島町役場　1982　『鹿島町史　資料編』後（上巻）
〃　1985　『　〃　通史・民俗編』
角川書店　1981　『角川日本地名大辞典　17　石川県』
鹿島町教育委員会　1985　「小竹ガラボ山古墳・小竹平遺跡」
石川県立埋蔵文化財センター　1978　「鹿島町徳前C遺跡調査報告（I）」
〃　〃　1983　「　〃　〃　(IV)」

II　調査に至る経緯と経過

井田堂坂遺跡、井田テラガイ遺跡は、新発見に近い形で検出されたと言ってよい。石動山麓帯への考古学的な調査は近年になって、ようやく、古墳・奈良時代の遺物が得られた小竹平遺跡や、中世に位置づけられる小竹沙弥堂遺跡の小規模な発掘が実施されている程度で、遺跡地図に登載されているのは、耕作の際や耕地整理工事中に遺物の発見が知られたものが多く、遺跡の範囲や時代、性格、包含層の状態については、不明となっているものが大部分である。一面で考えれば、大規模な開発行為から近年までまぬがれてきたと言えるが、調査された小竹平遺跡や小竹沙弥堂遺跡が圃場整備関連での緊急調査であった点に、今後の遺跡保護の問題点が提起されている。つまり、石動山麓の傾斜のつよい水田の整備は、平坦面を拡大する方向で削平と盛土がなされる為に、遺跡の受ける影響は平野部の水田と比較して格段に広範囲に及ぶものと理解でき、事前の分布範囲確認調査はより一層の綿密さが要請されていると考えられる。

一般国道159号は鹿島バイパスの一部供用開始により、県への移管が一部予定されていた。移管に先立って、井田地内の滝尾小学校の通学路の拡幅整備が計画され、昭和60年５月16日付で建設省金沢工事事務所から分布調査依頼が提出された。井田地内においては、歩道整備延長は620m の長さにわたり、工事幅は平均して約2.5m である。工事実施周辺部は総数30基を越える井田古墳群が分布し、耕作時に土師器皿の出土が伝えられる井田中世遺跡に近接するところから、協議を継続してきたものである。

昭和60年５月27日に、当センターの平田、米沢、越坂、西野が現地試掘調査を実施した。地下湧水点に近く湿地に近い水田には滞留水があり、試掘範囲は限定されたものとなった。滝尾小学校から北側地区は、耕作土約20cm の下は礫を多量に含んだ砂礫層が顕著で、遺物の包含を確認するには至らなかったが、北端部の畑地部分（井田テラガイ遺跡）は奈良、平安時代および縄文時代の遺物と黒褐色粘質土包含層が検出された。小学校の南側地区は傾斜面下にあたり、やはり湿地状を呈していて砂層の形成が多く認められたが、南端部分は傾斜面が変換する地点となり、土師器片の包含層（井田堂坂遺跡）が検出された。

同年５月28日に、建設省あてに２地点の発掘調査が必要との回答を行った。同年７月15日付で、２地点190m^2 の発掘調査依頼がなされ、同年８月１日付で、当センターとの間で、委託契約書が締結された。当センターでは、他の発掘調査現場との調整を行いながら、10月16日から現地作業を開始した。調査区は最大幅で約2.5m であるが、周辺の水田や道路との位置から、やや狭くしなければならなかった。排土については、工事区域内で処置しなければならず、時間的にはやや手間取った。また、９月以降から継続していた不順な天候にわざわいされて、降雨による作業中止が多く、現地調査を終了したのは12月５日で予定期間を大幅に延長しなければならなかった。

出土遺物の水洗、実測作業、報告書作製は、昭和61年１月～２月にかけて西野が行った。

調査日誌

10月16日（水曜）曇　建設省津幡出張所で、今後の現地作業の協議を行う。現地で、工事施行業者㈱在沢組と作業の進行について打ち合せをする。

10月17～18日　曇　器材点検および器材の現地搬入。

10月22日（火曜）晴　南端地区（堂坂遺跡）の表土除去作業を開始する。

10月23～25日（水～金曜）曇　表土除去作業をほぼ終了する。包含層から小片となった土師器、須恵器片が出土してくる。

10月28日（月曜）晴　水田の暗渠部から、縄文時代の砥石形石器が出土し、縄文期の遺跡との複合をも考慮しなければならないようだ。

10月29日（火曜）小雨　包含層の掘り下げ。平安～中世の遺物が７～12区の間で出土が目立つも小片で二次的堆積の磨耗しているものが多い。

11月７日（木曜）曇のち雨　前日まで降雨の日が続き、作業中止の日が多い。遺構の検出を行うも、12区で木杭の検出があるのみで、３～12区まで遺構の発見はなかった。

11月８日（金曜）曇　北地点（井田テラガイ遺跡）の表土除去をはじめる。調査区の幅は約2.7mで、長さ44mを４mごとに区切り、北東側から１区～11区に区分する。

11月９日（土曜）曇のち雨　テラガイ遺跡の表土除去を継続する。表土層に小片となった縄文土器、須恵器、土師器片が出土する。

11月20日（水曜）曇　堂坂遺跡の土層断面を清掃し、写真撮影。三角点からレベル移動を行う。堂坂遺跡は約70m、テラガイ遺跡は約76mであった。前日まで降雨の日が多く、一時は霰がまじり、石動山頂上は数cmの積雪となる。例年より冬の訪れが早いようだ。

11月21・22日（木・金曜）曇　表土除去作業を続ける。

11月27日（水曜）晴　堂坂遺跡の全景写真。テラガイ遺跡の上層部分での写真撮影と実測。

11月29日（金曜）雨　堂坂遺跡の平面実測。９区の砂層を下げると、磨耗した縄文土器を含む淡黒褐色砂礫層があり、検討が必要だ。

12月２日（月曜）雨　堂坂遺跡の８～10区約10mを掘り下げる。土砂降りに近い雨のなか、礫層を取り除いてゆく。流入したと見られる縄文土器が散発的に出土し、礫層が薄くなり、傾斜が変位する地点で、横転してつぶれている粗製土器一括を検出した。

12月３日（火曜）晴　土器一括品の写真撮影および取り上げ作業．テラガイ遺跡の黄褐色土を重機を使用して取り除く。建設省の現地視察。

12月４日（水曜）曇　テラガイ遺跡の遺構検出作業。堂坂遺跡の土層断面実測。

12月５日（木曜）曇　テラガイ遺跡の全景写真撮影を行い、平面図、土層断面の作図。

12月６日（金曜）曇　器材の点検、現場事務所の撤去

調査協力者名簿（敬称略、順不同）

原田　博、大島源次、豊原秀雄、竹口一郎、野村忠吉、北吉定男、泉　武夫、中山松二、泉　栄

次(鹿島町井田)、田中一雄、石垣茂蔵、藤重吉二、中島一一、岡崎一男、此内明治、長田伊之介、守澤秀則、塚林祐三、森　政治、高田育夫、高塚茂雄、上岸政信(七尾市シルバー人材センター)

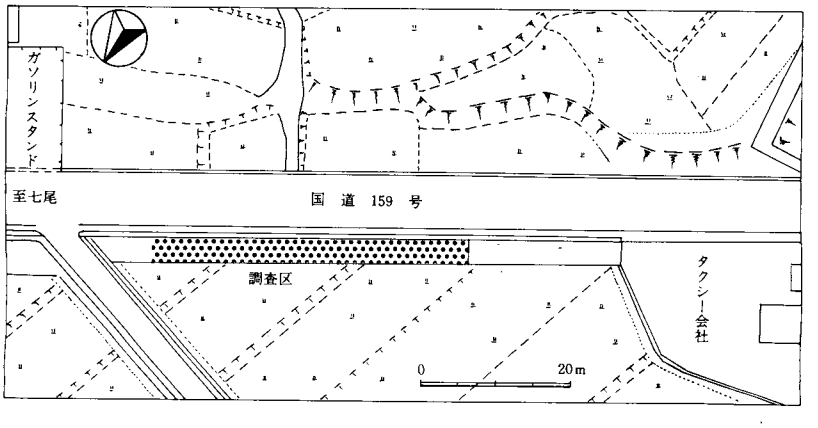
III　層序と遺構

1　井田堂坂遺跡

(1)　遺跡の状況

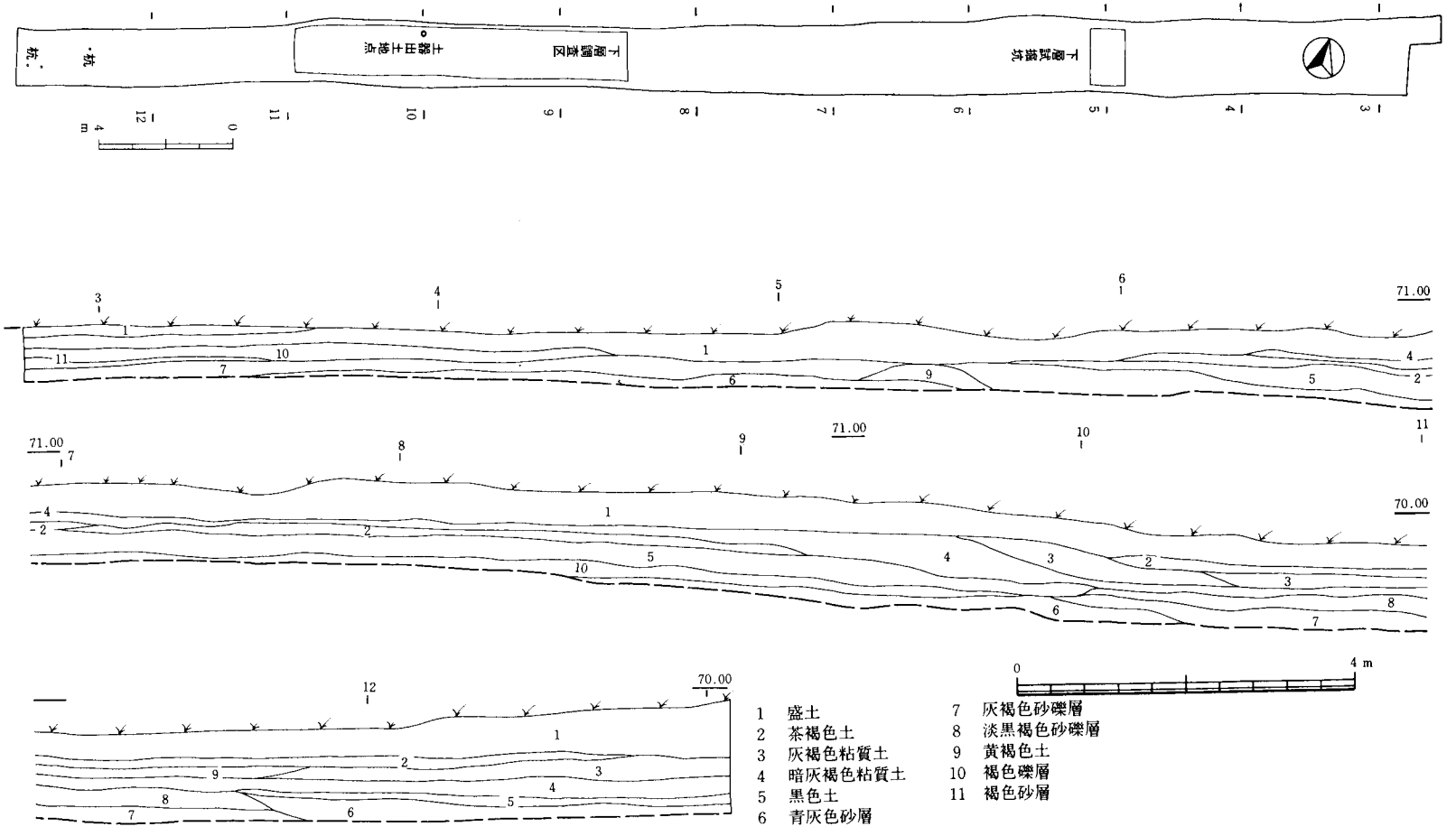
調査区は石動山麓の傾斜面上にあたり、邑知地溝帯へ移行する変換点に位置している。調査地点の標高は約70mで、石動山系から西方に向けて流れ出る熊野川が形成したと想定される旧扇状地形の扇央部にあたる。国道をはさんだ東方側の傾斜は急で、調査地点から約50m南方に位置する堂坂古墳は、なだらかな傾斜面の端部にあたり、羽咋方面にまで眺望がひらけている。微地形的な変化で見ると、熊野川が押し出した扇状地は、山麓側に接続する部分と地溝帯側に突出した部分とに分けて考える事ができ、その境界を国道が走っていると言える。つまり、熊野川の形成した扇状地は、小扇状地が複合したものとしてとらえる事ができ、本調査区は、それらの扇状地の境界付近に位置しているものと考えられる。堂坂古墳の背後、東方部分は柵田となる水田が開けており、比較的ゆるやかな傾斜を持つ地勢のなかにある。堂塚古墳周辺の水田には、須恵器、土師器の断片が散布していて、それらの時期や性格はつかめないものの、広範囲にわたる遺跡の存在が有力視される。さらに背後の丘陵には、仙人塚をはじめとする30基にのぼる井田古墳群、熊野神社経塚群が所在しており、扇状地内に在る岡野山１・２号墳を含めて、それらをささえた集落址の把握が急がれていると考えられ、邑知地溝帯内の集落の探求と共に、石動山麓の傾斜面への注意も払う必要があるものと見なされる。

調査区はきわめて限定された形でしかとりえないために、分布調査時の成果を含めても、遺跡の範囲も性格も把握できたとは言えないものの、既述した微地形のなかでの推定をすすめてゆきたい。調査区は滝尾小学校側の歩道部分拡幅整備工事にともなうものであるところから、幅２～３mのトレンチ発掘で、延長は約42m、面積約80m² である。傾斜地内にあるところから、法面を考

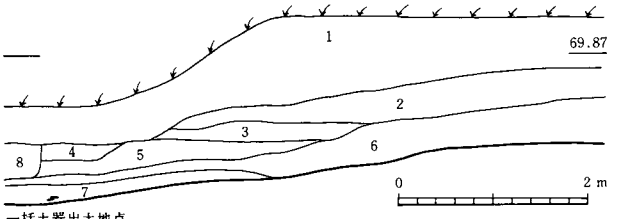


第４図　井田堂坂遺跡調査地点（S＝1/1,000）

第5図　調査区平面図（S＝1/200）



第6図　土層断面図（S＝1/80）



1　耕土(畦畔の部分)
2　黒褐色土(平安期の包含層)
3　黄褐色砂層
4　淡黒褐色土(平安期の包含層)
5　青灰色砂層
6　灰色砂層
7　灰褐色砂層(縄文期の包含層)
8　暗茶褐色(攪乱層)

第７図　縄文土器出土地点土層図（Ｓ＝1/80）

慮して国道側では、若干発掘幅をせばめている。調査グリッドの設定は、調査区の北端部で任意の基点を設けて、南西側に向けて４ｍ区画で順次グリッド番号をのばしていった。調査は３～12グリッドまでの10区画である。

検出された遺構は、12グリッドの平安時代以降と見られる３本の杭の検出にとどまる。

遺物の出土は希薄なもので、上層部分では中世を含めて散発的に断片の出土を見るのみで、比較的数量が多いのは11・12グリッドであった。しかし、11・12グリッドにおいても、全形が想定し得る資料の検出はまれであった。縄文時代の包含層においては、小砂礫、砂、礫が互層をなすような状態を示していて、包含されている土器片は一部を除いて流下による磨耗が進行しており、調査区が集落の周辺地区である事を推定させている。

(2) 層　　序

旧扇状地の複合した境界付近に位置している事から、層序は流下してきた砂、礫層が混じり合う大勢のなかにあり、遺物包含層中にも礫の混入が多く見うけられた。上層の包含層をのせている青灰色砂層、褐色礫層は地区を変えながら現われているが、地山としてのベースは、国道に沿うかたちで南西方向に傾斜を持って堆積してゆくようだ。堂坂そのもののベースとして考える事もでき、鹿島町教育委員会が調査した小竹ガラボウ山古墳のベースとして検出されているものと直接的につながるものと考えておきたい。

平安時代以降の包含層である上層の黒色土は、傾斜の角度が強くなる５グリッドから堆積し、茶褐色土と暗灰褐色粘質土をのせて、７～９グリッドまで堆積している。傾斜面は最も強くなる８グリッドでの層厚は16cm をはかる。10･11グリッドでは黒色土層が途切れて、淡黒褐色砂礫層が先行する状態で堆積していて、傾斜面が段をつける12グリッドでは、粘性を帯びた黒色土が薄く堆積している。土層の堆積の時期的な差による変化と共に、同一斜面上においても微地形的な変化に対応する土層の微妙な違いを見てとる事ができる。

縄文時代晩期の包含層は、調査区の排水用の溝を掘り下げていった時に、ベースとしていた灰

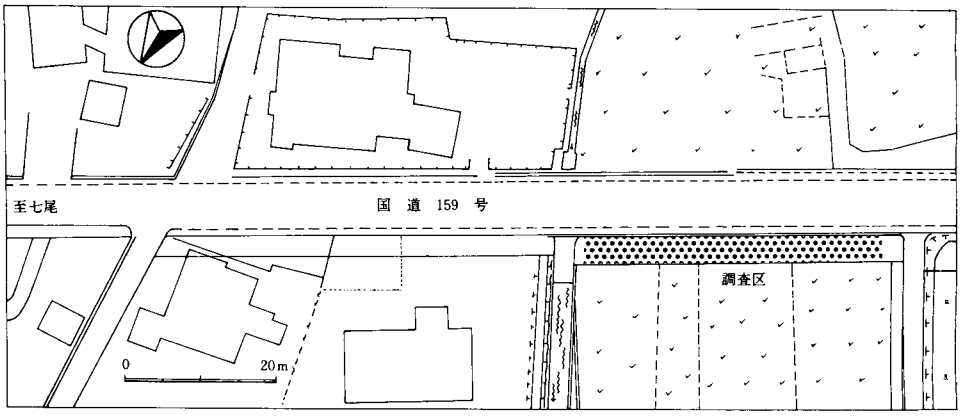
褐色砂礫層のなかから、流下して磨耗した土器片が得られた事によって発見したものであり、その発掘範囲は限定されている。発掘区は第5図で図示したように、8グリッドの西半分から9・10グリッド、長さ約10m、幅1.3mの範囲である。発掘区の北側壁で見ると、青灰色砂層、灰色砂層が約30～40cmの厚さで堆積しているが、まったくの無遺物層ではなく、灰褐色砂礫層に近い部分では磨耗した土器片をわずかに含んでいる。縄文時代の包含層である灰褐色砂層での遺物の出土も、磨耗している土器片が多く、一部を除いて散発的に出土している事から、二次的堆積ではないかと想定される。一括状態で出土した粗製の深鉢は、胴部が重なり、底部が上を向く状況で出土している事から、口縁部分を下にして斜め方向につぶれたものと考えられるが、周囲に比較的大きな断片と底部片が見られる点から、傾斜面がゆるくなる転換点と見られる状勢を鑑みて、転落してきているものと理解しておきたい。同調査区の国道側、すなわち南方側の土層を見ると（図版5参照)、礫とするより岩塊と言えるものが重なりあい、層序としてはつかみきれていないものの扇状地地形の一端を示している。岩塊の間の砂礫層からも少数例ではあるが、遺物の出土が確認されてる。一括土器出土地点にまでは岩塊は押し出してはおらず、堆積層の大きな転換地点としてとらえられ、第7図で示されている縄文時代の包含層は、岩塊層をまわり込むように堆積したものと想定される。5グリッドの褐色砂層を掘り下げたところ、約1m以上にもわたって青色砂層が堆積していて、縄文期の包含層の確認はとれなかった点をも考えてみるならば、包含層は調査区を斜めに横断する狭い範囲に想定され、集落址の地点もおのずからうかび上がってくる。国道側には若干の平坦地があり、段をもって堂塚古墳ののる台地がひろがっていて、集落の形成には十分な条件がそなわっていると言える。また、想定した集落から見た調査地点は、地形の変換地点であり、湧水の豊富な谷地形として、集落のなかに包括されるものと考える事も可能である。

2　井田テラガイ遺跡

(1)　遺跡の状況

井田テラガイ遺跡は標高約75mをはかり、邑知地溝帯をのぞむ傾斜面上に立地している。石動山麓は北東方向にのびてゆき、所々に山系から流れ出る小河川による谷や小扇状地が形成されているが、本調査区は山麓ラインに平行して走行する等高線が水田地区にまで、展開している事でも理解されるように、小河川の解析からまぬかれているように推定される。しかし、本調査区の南西方向の水田では、耕土層下に砂礫層が認められている事から、出水による砂礫層の堆積が想定され、扇状地ほど顕著ではないまでも、山麓ライン上での地形による影響をまったく受けていないとは言えないようだ。

国道159号は斜面の等高線に平行するかたちで建設されており、本調査区は試掘調査によって包含層の形成が確認された長さ約40m、幅2.4mのごく限られた範囲であり、遺跡の範囲や性格については充分に把握されたとは言えない。



第８図　井田テラガイ遺跡調査地点（Ｓ＝1/1,000）

調査グリッドは調査区の北東区の北東端に任意の点を設けて、南西方向に１～10グリッドまでを設定した。調査面積は約100m² である。遺物の出土は全体的には希薄で、北東寄りで比較的多く、南西寄りではほとんど出土は見られなかった。黒褐色土の包含層からの遺物の出土は少く、表土層および黒褐色土の表土層との層理面での検出が多く見うけられた。

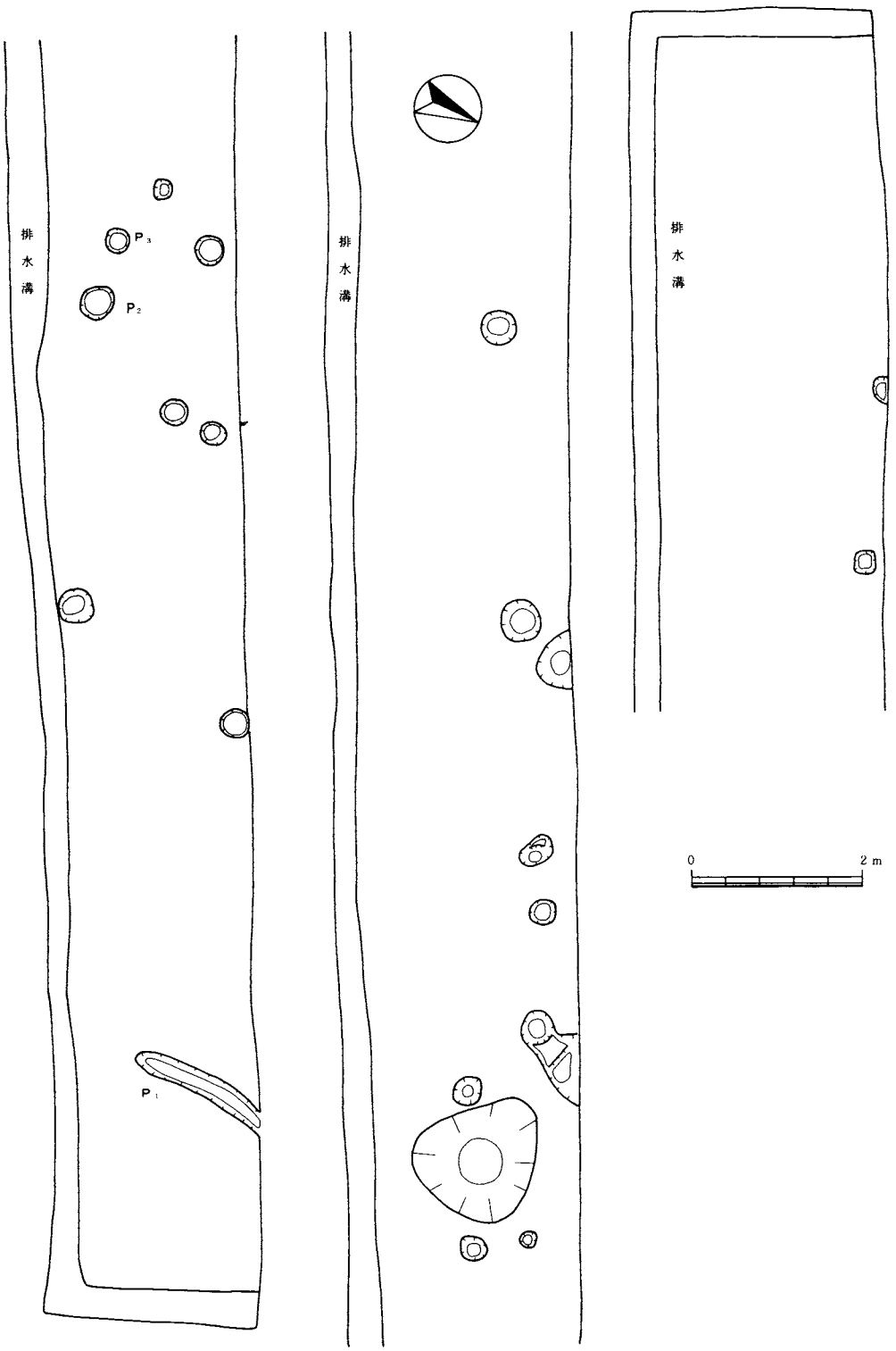
検出された遺構は、20個のピット、１基の土坑、１条の溝の少数にとどまり、遺構の性格を明確にするまでにはとどかなかった。

遺跡の範囲は明快にとらえられないが、遺構の配置や包含層の傾斜等を鑑みるならば、調査区の北方および北東方にひろがるものと推定され、国道をはさんだ山麓側での展開は薄いように考えられるが、小河川をはさんだ北東方向には若干の平坦地があり可能視できる。

(2) 遺構と層序

層序で見ると、黒褐色土の包含層は北東部分が最も厚く堆積していて32cm を測るものの、南西方向約18m で途切れてしまう。それ以降の地区は黄褐色粘質土層、黄褐色砂質土層があらわれ、ピットの掘り込まれる無遺物層である。南西端部では黄褐色砂質土約20cm の層厚をはかり、その下位には淡黒褐色粘質土層が約40cm の層厚をもって堆積していた。試掘調査の際には、北東、南西端で試掘坑を設定していたために、別個の層位を同一の遺物包含層と誤認するという結果となり、地山面は南西方向に傾斜しているものとして調査にのぞむあやまりを犯す事態となった。調査の進展によって、途切れてしまう包含層から地山面の傾斜の方向がまったく逆になるという認識が得られ、南西部分の淡黒褐色粘質土層を下位の包含層との想定を持ったが、実際には遺物をまったく包含しない斜面下に形成された腐蝕土層であった。

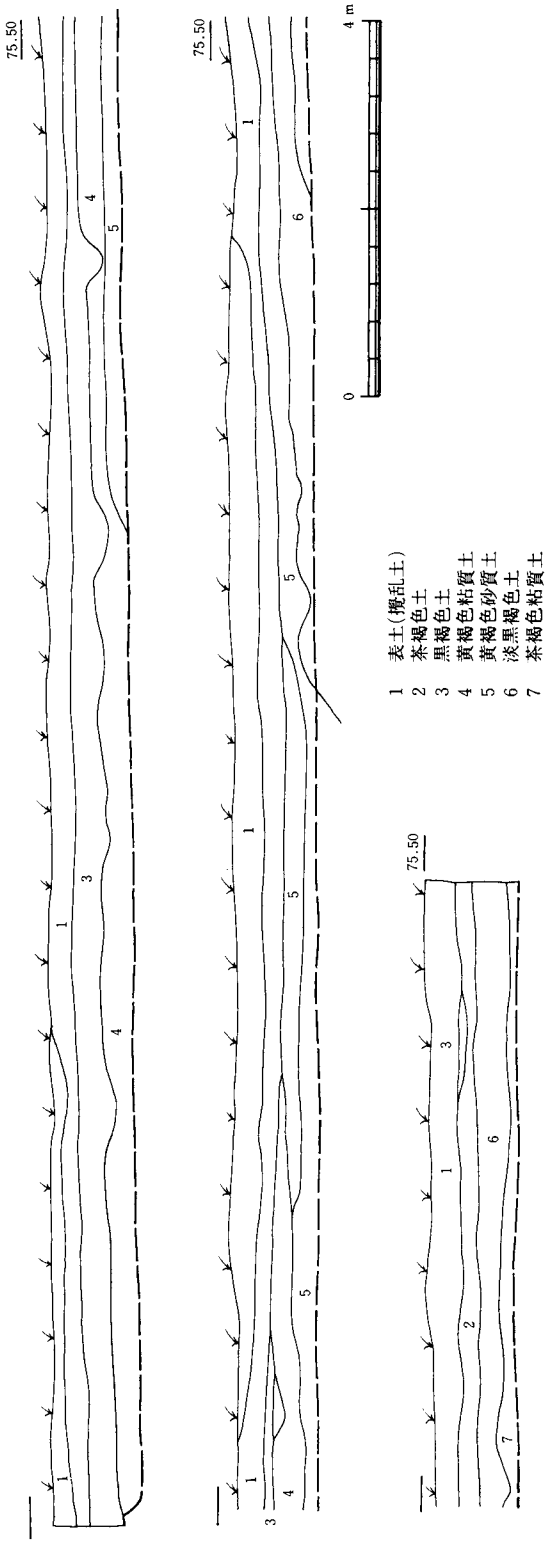
本調査区は北方向の谷地形に向けて傾斜しており、出水による黄褐色砂礫層の堆積ののちに、人々の生活の舞台となったものと考えられる。その後、現在の地形図で読みとれる北西方向に傾斜する山麓ラインに沿うかたちに成形されたのではないかと思われ、表土層中に散見された土器



第９図　調査区平面図（S＝1/80）

片の理解も容易にできるようだ。

遺構の検出はピットが中心で、径20～35cm、深さ10～20cmのものが大部分であった。限定されたトレンチ調査であるため、ピット相互の関わりをつかむまでには至らなかった。発掘区の北東部の不整円形を呈する土坑は、径140×160cm、深さ約10cmで、中央部分が最も深くなる皿状断面をなしている。覆土からの出土遺物は認められなかった。発掘区の北東端では、幅約30cm、長さ160cmの溝が1条検出された(P1)。覆土は黒褐色土1層でなり、出土したのは小片となる縄文土器、土師器、須恵器であった。P2・3で土師器片を得られたものの、他のピットでは出土遺物は皆無であった。



第10図　土層断面図（S＝1/80）

Ⅳ　出土遺物

1　井田堂坂遺跡

(1)　縄文時代の遺物（第11図～第12図13）

縄文時代の遺物の出土状況は前節で記述したように、砂礫層中に包含されており、二次的堆積による磨耗が進行している他に、条痕調整の粗製土器片で占められている為に図示できるのは、非常に限られている。ちなみに得られた破片は図示したものを除いて140片あまりで、底部片は1片である。少数であり、個別に説明を加えてゆく。

1は蓋器形をなすものに想定したもので、器表面に赤彩痕をかすかに見る事ができる。蓋器形のなかでは大型品に属するもので、器肉は比較的厚くつくられている。沈線で区画された帯には、細かい撚りの縄文が施され、無文部分にも縄文をともなう文様がつけられているが判然としない。内外面ともナデ調整が加えられているが、内面での調整は粗雑である。

2は中屋式期の深鉢の胴部片に推定した。器表面には赤彩痕を明瞭に見てとる事ができる。欠損している上端には、入組三又状文を施文した削りこみの縁を見る事ができ、胴部下半と縄文帯の境界は段状を形成しており、中屋式期深鉢の特徴をしめしている。色調は灰褐色を呈し、胎土は精選されている。

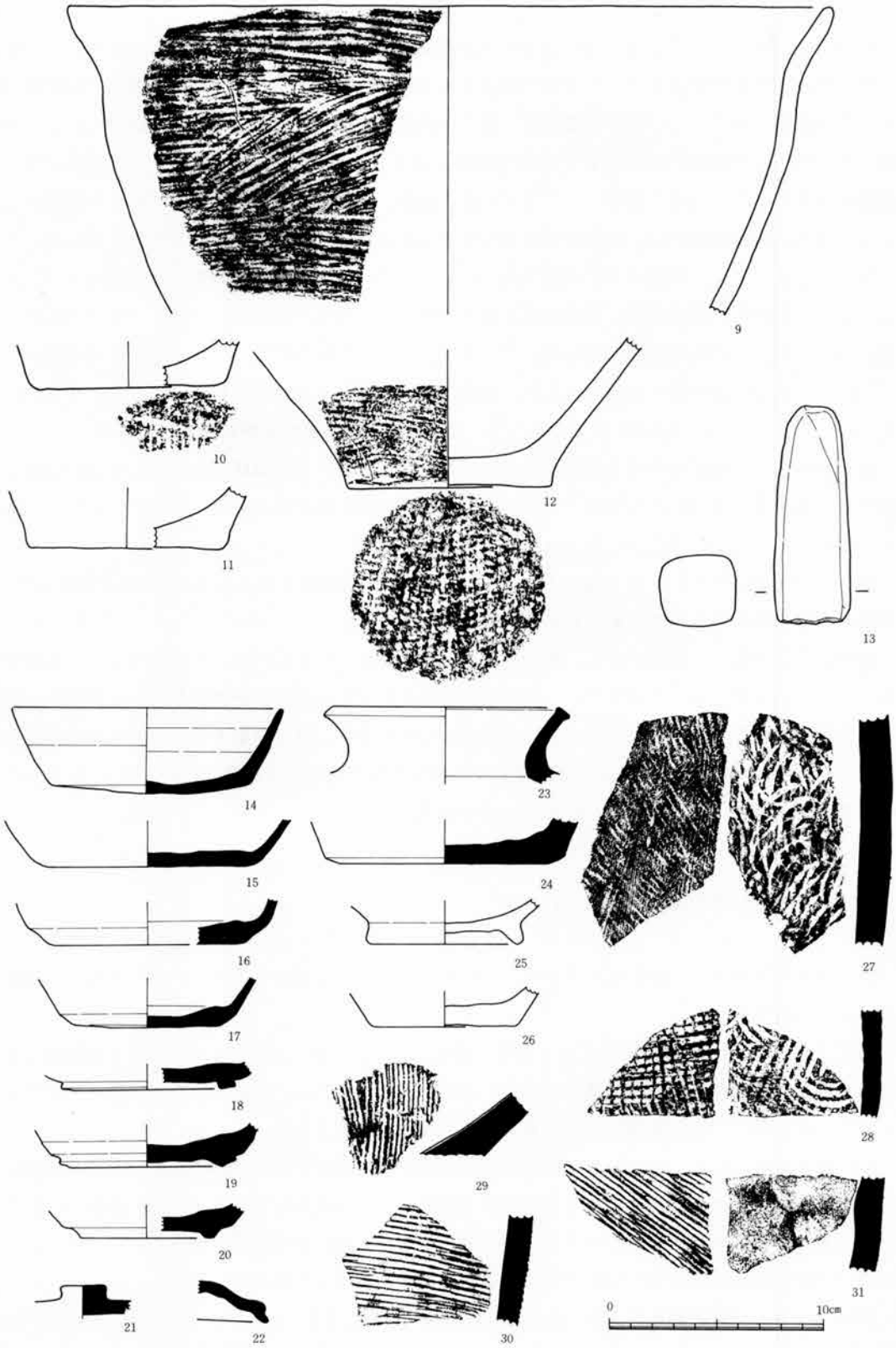
3は著しく磨耗が進行しているもので、皿器型とともに蓋器形を推定する事も可能である。平行沈線文で区画した内部に斜行した沈線文が引かれている。口縁端部内面が肥厚する器形とともに、特異な施文を持っているもので、所産時期については検討を要する。色調は濁灰褐色を呈し、胎土に混じる砂粒は微小で粒が均一に近い。

4は口縁端部に文様が集約されているもので、単純な器形をとる深鉢が想定される。口縁に沿って2条の平行沈線が引かれ、それらと間隔を同じにして、同一工具を使用した太目の列点文（短線文？）が施文されている。沈線文内には施文具による細い条線を明瞭に見る事ができる。沈線文以下の胴部には、左下りの条痕調整が施されている。器種は10mmをはかる。内面には横ナデ調整が加えられている、やや粗い。色調は淡橙褐色を呈し、胎土には砂粒が多いが、良く焼きしめられている。晩期後半の下野式期に位置づけられてるものの、器形的には検討が必要である。

5～7は粗製深鉢型土器の口縁部断片である。5・7は口縁部が外反するタイプで、6は外傾気味に直立するものである。5は口唇部分の器壁が薄くつくられ、押圧痕が置かれているが、口縁端部には押圧痕を加える際に器体を支えたとも思われる等間隔の圧痕が遺存している。指頭圧痕とは速断できないものの、注目しておきたい。条痕は横方向に丁寧に加えられている。6の口唇部は丸味をもって整えられている。内面への調整は、5～7とも丁寧になされている。

8は横転した状態で出土したもので、底部から口縁まで接合する事ができた唯一の資料である。口径42cm、器高46cm、底部径9.4cmをはかる。ゆるく外反する口縁部をつけ、口唇部には押圧に

第 11 図　井田堂坂遺跡出土土器(1)（1/3）



第12図　井田堂坂遺跡出土土器(2)（1/3）

よる列点文が加飾されている。体部上半への条痕調整は、左下りで左から右方向になされ、それに先行するかたちで胴部下半への調整が左上りの方向で行われている。調整は下半部では粗雑で終えている。口頸部のくびれる位置には、横方向の調整が加えられている部分が認められる。外周では底部から約20cmまでには、二次的加熱によると見られる変色が見られ、それの上部に煤の付着が顕著である。内面の調整は、下半が斜め方向で、それより上部では横方向のナデ調整が施されている。口縁端部では、口唇に列点文を加えた際の押圧痕が遺存している部分が見られ、それを消すようにして、内面のナデが施されている。これらの事から、成形後には最初に口唇部に施文されたものと理解できる。内面の炭化物の付着は、内底面から2cm～12cmの高さの範囲に見る事ができ、口縁部分内面には付着していない。色調は茶褐色を呈し、胎土に砂粒が適度に混入されているが、器表面では目立たない。焼成は良好。底部は大型品の器体に比べて、小さめに作られていると言え、径10cm以下であった。底部には簾状圧痕が明瞭に遺存している。

9・12は8の大型品に接する位置から検出したものである。9は口径36cm、現器高14.5cmをはかる。外折する口縁部から体部全体に横方向の条痕調整が施されている。暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒が目立つ。内面への調整は粗雑である。

10～12の底部は9～9.6cmをはかり、ともに粗製土器の底部片と見られる。10には簾状圧痕が、12には湾曲した形状を持つと見られる網代痕を残している。

13は出土した唯一の石器である。砥石状石器と呼称されているもので、方柱状を呈し、長軸両端で若干の幅を減じるのが特徴で、石質は砂粒が比較的大粒の砂岩質が選択される。本例は一部分を欠損しているが、完形品での遺存状態での出土例が多く、敲打作業をともなわない磨り石と想定され、硬質の砂岩質の磨石とは異なる作業に使用された実用品と推定しておきたい。長さ10.3cm、幅および厚さ3.3×3.5cm、重さ165gをはかる。

(2) 奈良時代以降の遺物（第12図14～31）

出土状況は単独出土に近い在り方を示し、小片となっている例が大部分で、全形を窺える資料は極めて少数であった。

14は口径12.8cm、器高4.1cmをはかる唯一全形がとらえられる資料である。外周では体部と底部の境界が明確な稜線となって成形されているが、内面ではさほど明瞭ではない、深めの坏である。灰褐色を呈し、重ね焼きの痕跡が見られる。焼成は軟調である。

15～17は坏底部片で、おのおのの成形の違いが見てとる事ができる。15の底部は平均した器厚を示し、16は体部の下端がくぼむような成形で底部を、浮き立たせている。底部と体部との器厚の差が大きい。17は胎土、焼成とも良品で、底部中央がくぼむような調整がなされている。成形の違いを時期差に反映させなければならないが、現在の時点では判然としない。

18～20は有台坏の底部片である。高台径で6.4～8.4cmまでをはかる。高台の断面、接合状況は個々によって異なる。18はヘラ記号が入れられている例で、高台は断面方形状を呈し、丁寧に接

合されている。19の器壁は比軟的厚く、台形状の高台がつけられ、内周に幅広くナデ調整が行われている。20は19と同じように器肉の厚いタイプで、底部中央がすぼむ器形をとると想像される。

21、22は蓋器型の断片である。21はつまみ部片で、径2.2cmのボタン状を呈している。22は体部端が傾斜を変えて平坦面を形成し、内屈する口縁部は端部で大きく外折して、断面嘴状を呈する。内面ではナデによる圧痕が強い調子で遺存している。

23は横瓶の口縁部片である。口径10.6cmをはかる。口縁には窯体内で付着したガラス状の窯壁が大きな塊となって付着している。

24は壺底部片で、底径9.8cmをはかる。底部と体部との境界でのナデ調整は、やや粗雑である。内面は櫛状工具による細い条線が見える。胎土に砂粒は少く、焼成も良好で、灰青色を呈する。

25は土師質の有台坏である。磨耗のため、調整は不明である。

26は土師質の小型甕の底部片である。底径6.8cmをはかる。色調は茶褐を呈し、胎土は精選されており、砂粒は目立たない。

27・28は須恵器の甕の胴部片である。27は厚手のもので、焼成は軟調である。胎土は良好。28は堅緻な焼成となるもので、器表面に格子目状の叩き具が使われている。

29～31は珠洲焼の断片で、29は鉢底部近くの資料と見られる。

2　井田テラガイ遺跡

(1)　縄文時代の遺物（第13図１～６）

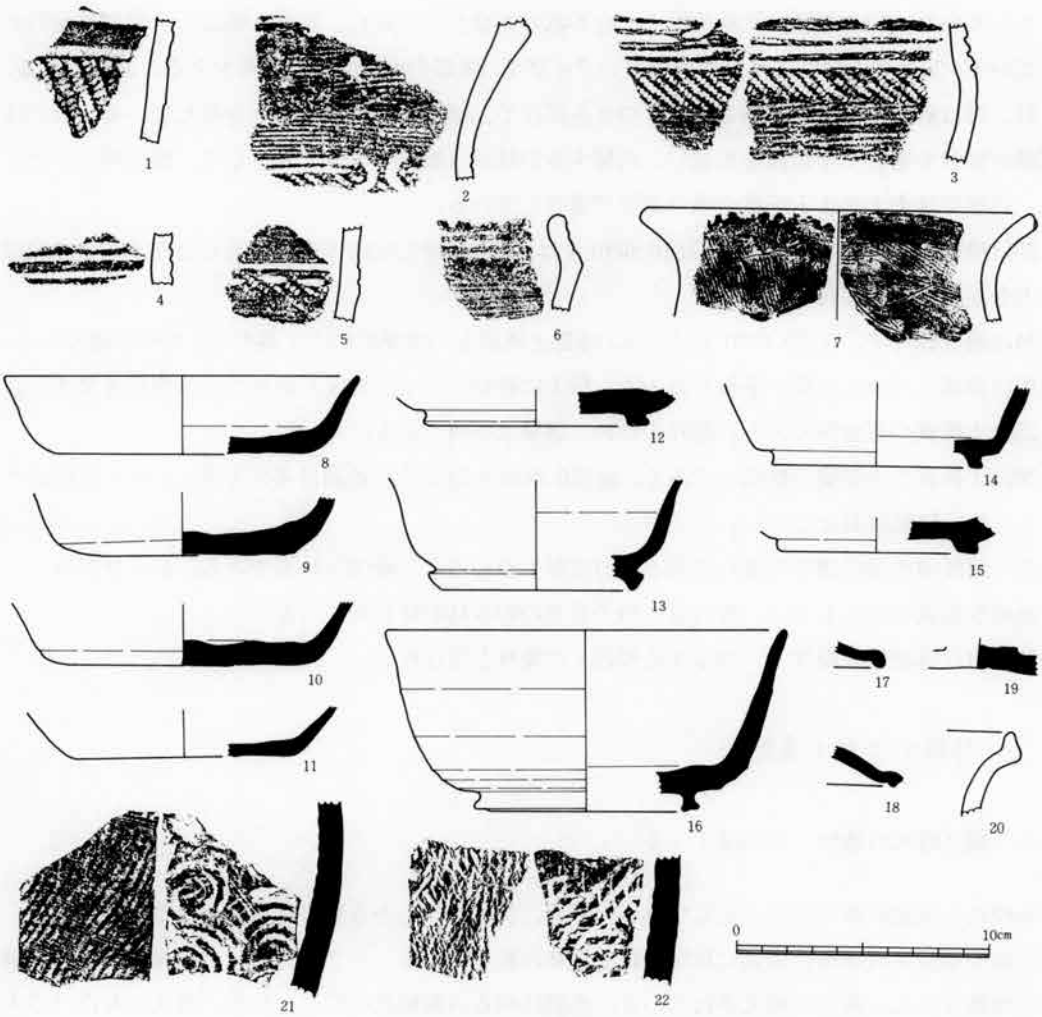
各時代の遺物が散発的に出土しているのみで、まとまりをとる資料は得られなかった。

１は中期後半の串田新様式に比定される深鉢の断片である。ヘラを利用した凹線が引かれ、胴部には撚りの太い縄文が施文されている。色調は明るい茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。内面のナデ調整は入念になされている。

２～４は同一個体片と見なされる後期後半、八日市新保様式の深鉢断片である。２は口頸部が外反してのび、口縁帯で内屈気味に立ち上がるもので、口縁帯および頸部と胴部の境界に文様帯が置かれる。胴部上半に胴部最大径がくる器形をなすものと思われる。口縁帯の文様、施文単位は、沈線文が引かれる事しか想定できない。頸部には横方向の条痕調整が施され、頸部下半に相対する弧線が平行する沈線文を集約させている。沈線文は１条ごとに引かれ、一息で引くのではなく、２～３cmごとに区切るように引くもので、工具の引きはじめの圧痕を明瞭に見ることができる。平行沈線は６条程度が想定され。沈線間と下半にＲＬの単節斜縄文が加飾されている。縄文以下の調整は、横方向の条痕調整がなされている。内面へは横方向のヘラナデが施されている。色調は器表面で濁黄褐色、内面で暗褐色を呈し、胎土には砂粒は少く、精選されている。

５は口頸部片と見られるが判然としないもので、横方向の条痕調整が薄く見える。幾分盛り上がる部分に沈線と列点文および縄文が施文されている。

６は内屈する口縁部片で、５と同一個体と想定できる。口縁帯は磨耗していて、沈線文３条が



第13図　井田テラガイ遺跡出土土器（1/3）

引かれているものを、かろうじて推定する事ができる。胎土は精選してあり、焼成も良い。外面の色調は茶褐色を呈し、よく磨かれた内面は暗褐色を呈している。

5・6は先に記述した2～4に類似した文様、調整をなすところから、同時期の所産とみなしてよいようだ。

(2) 弥生時代以降の遺物（第13図7～22）

7は口径15.4cmをはかる甕の口縁部片である。器表面は縦方向、内面は斜め方向の櫛歯状工具による調整が施されている。口唇部外縁には連続刻目文がつけられている。口縁部上半には煤の付着が見られる。器表面の色調を呈し、胎土に若干の砂粒を含むが、精良と言える。弥生時代中期後葉～後期段階に位置づけられよう。

8～11は須恵器の坏破片である。8は口径14cm、器高3.1cmをはかる。全体的に薄く成形され、

胎土には砂粒の混和が多い。9・10は口縁部を欠いているものであるが、底部の器内は厚く、奈良時代の所産と推定される。11は口縁の外傾度が大きくなるタイプで、器壁が薄く均一であるところから平安時代に比定される。色調は黄灰色を呈し、胎土は良好であるが、焼成は軟調である。

12～15は有台坏の断片である。14を除いて、底部と体部の境界は丸味を帯びていて明瞭ではない。高台は13では嘴状に外展してつけられている他は、外側にふんばる形状を持っている。底径は7.8～9.8cmまでの幅を持つ。器壁の比で見ると、14は比較的均一な厚さで成形されており、若干後出的と見なされ、12の底部は先行する時期に位置づけされる。いずれも青味の強い灰色を呈し、焼成は堅緻である。

16は大型有台坏である。小片から図示したために、器形、口径に不安が残る。高台は鉄道のレール状の断面形を示す。体部と底部の境界は明確ではなく、丸味を持って成形されており、底部の厚みとともに奈良時代の所産かと思われる。胎土に砂粒は少く良好で、焼成はややあまい。

17～19は須恵器蓋の断片である。17・18の口縁端部のおさめ方は大きく異なっている。19は径2.5cmのつまみ部分を欠いている資料で、内面に沈線1条のヘラ記号が見える。

20は土師質の甕の口縁部片である。内外面ともに丁寧にナデ調整が施されている。暗褐色を呈し、胎土には若干の砂粒が混じる程度で良好である。

21・22は須恵器甕の胴部片である。

V まとめ

井田堂坂遺跡、井田テラガイ遺跡の今回の発掘調査は、幅2～3m、長さ40～44mとトレンチ調査にちかい限定されたものではあったが、それぞれの調査で縄文時代から中世に至る遺物の出土が見られ、長期間にわたる複合遺跡である事が明らかになった。邑知地溝帯の考古学的な資料は、地溝帯をのぞむ丘陵上の古墳群や丘陵端部の大型古墳に注意が注がれてきたが、(註1)厚い堆積層下にある低地帯への調査例の増加にともなって、(註2・3・4)古墳群を支えた集落址の検討へと研究課題が進みつつあるようである。縄文時代においても、耕地整備の工事中に単独出土した磨製石斧類の石器が伝承として残されている程度の寒々とした状況であったが、中期前半代の好資料が出土した徳前C遺跡の発見は、地溝帯への認識を大きく転換させるものであった。(註5)県下でも最高所に位置する福田原山遺跡の調査成果によれば、断続的な居住と小規模集団との想定が成り立つものとされており、親村的な拠点集落は地溝帯周辺に求めるのが妥当視される。今回の発掘成果では、中期に限定されてきた邑知地溝帯域の資料に、少数とは言え後期・晩期の資料を追加する事ができた事と傾斜面上での発見という立地的な側面をも取り上げねばならないと思われる。縄文時代にとどまらず、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世にかけて、地溝帯の縁にあたる斜面上には、間断をおかずに複合遺跡が連なる様相を考える事が可能視され、現在の路村的集落の展開に重なる状況を見るのではないかと思われる。

井田堂坂遺跡は本文中にも記述したように、その範囲は大きく拡大するものと見られ、地溝帯方向には奈良・平安時代の遺跡が、国道をはさんだ斜面の上には縄文時代・古墳時代の遺跡が存在すると推定される。縄文時代では晩期の中屋式期以降の時期に推察され、砂礫層中に包含されている遺物の状態から一時的なキャンプ地とは考え難いと思われ、さらに時期幅、規模を拡大しうる可能性があると言える。

井田テラガイ遺跡は平安時代期のピット群の検出から、該期の集落址の一部と見なされるものの、その中心域は明らかではない。平安時代以前の時期についても、散発的な遺物の出土状況から地形的な視点を含み込んでも、遺跡の状況を類推する事は井田堂坂遺跡以上に困難と言わざるを得ない。今後の周辺部分への調査成果に待つ所が大きい。断片的ではあるが、縄文時代中期後半、後期後半、弥生時代中期後葉の土器片は、今後の調査にとって大きな指標となりうるものと想像される。

さて、井田テラガイ遺跡から出土した後期後葉の土器片（第13図2～6）の分布状況について考えておきたい。腰部が若干張り出し、外傾しながら口縁部がのびる器形やx字状のポイント文様から、八日市新保式期の古い時期に比定されるものである。

x字状のワンポイント文様の土器が出土している遺跡は、野々市町御経塚遺跡の第2・12類、(註6・7)能都町・波並西の上遺跡の第6群第1類、(註8)金沢市犀川鉄橋遺跡の第1群第1類a、(註9)門前町道下元町遺跡の1群、(註10)押水町上田うまばち遺跡の第6群が(註11)上げられる。富山県下での出土例を見ると、朝日貝塚、岩瀬天神遺跡、(註12)本江遺跡の後期後半、波状深鉢J_9型等(註13)を上げる事ができる。南加賀地域

では、鶴来町白山遺跡[註14]、加賀市横北遺跡[註15]等の後期後半の集落址での出土は認め難いと言え、小島俊彰氏の北陸の西部・東部での地域差をあらわしているものと考えられ、出崎政子氏の成果をより細分化したものとして評価される[註16]。小島俊彰氏は論文「井口式土器」のなかで、縄文を施文して三角状の彫り込みを持つものを朝日水源池型、弧線を背中合せに組みx字状のワンポイント文様を持つものを田家型とし、北陸東部での地域特色を上げ、高堀勝喜氏分類の北陸西部での八日市新保式１Ｅ類（型）[註6]に併行するものとしてとらえられている。八日市新保１Ｅ型は棒状短線で平行沈線を区切るものであり、滋賀里風としての指摘から晩期につなぐ過渡的なものとして位置づけられ[註17]、八日市新保Ｉ式土器として編年されたが[註18]、滋賀里風としての根拠は一部の器型を除いては弱いものと愚考され、高堀勝喜氏が自ら指摘するように、縦短線が棒状であるか、抉りが加えられるかでの八日市新保Ｉ・II式土器の型式設定には微細に傾きすぎるきらいは否定できない。また、北陸での東西での地域性が、それぞれに融合してゆく社会的な根拠にとぼしく、筆者が先年提起した後・晩期の編年画期を主体性を持って受けとめ得たとは、勝木原式、御経塚式土器とも弱いように受けとられ、斉一性の強い八日市新保式（II式）の位置づけには再考が必要と考えられる。それは、北陸の東部・西部での地域的編年の確立が要請されているものであり、田家型、朝日水源池型、八日市新保１Ｅ型をそれぞれに系列をたどる手法こそ求められていると思われる。近年の後・晩期の資料には目を見はるものがあり、さらなる研究が期待される。

さて、本遺跡出土の田家型深鉢は、縄文、列点文が加えられ、体部には横方向の条痕調整がなされているもので、御経塚遺跡出土例で見る如く、極めて出土例のとぼしいタイプである。平行沈線とx字状ポイント文でとどめられている例は、滑川市本江遺跡出土例をはじめとして比較的多くの出土例が見られるが、前段階からでの施文手法では平行沈線上に刺突文が加わるものとは異なり、刺突文で平行沈線を切らずに文様単位として独立している点に注目しておきたい。また、条痕調整が精製土器でなされている事は、粗製土器の縄文、無文土器に条痕調整土器がどのような形で入り込んでゆくのかを見るうえで、ひとつの手掛りとなるものであり、北陸東部の田家型の文様系統の受け取り方と、北陸西部での受容形態の違いを浮かび上がらせるものとしても考えていきたい。

註１　鹿島町役場　1982「鹿島町史　資料編（続）」
　２　湯尻修平　1978「鹿島町徳前Ｃ遺跡調査報告（Ｉ）」石川県教育委員会
　３　山本一信　1985「小竹ガラボ山古墳・小竹平遺跡」鹿島町教育委員会
　４　水白Ａ・Ｂ遺跡の調査が、能登送水関連事業にともなって実施され、古墳時代後期以降の資料が出土している。
　４　米沢義光　1982「徳前Ｃ遺跡」『鹿島町史　資料編（続）』鹿島町役場
　６　高堀勝喜　1964「金沢市近郊八日市新保並びに御経塚晩期遺跡の調査」『押野村史』
　７　宮岸久司、湯尻修平、米沢義光　1976「野々市町御経塚遺跡調査（第８次）概報」石川県教育委員会
　８　平田天秋　1976「能郡町・波並西の上遺跡発掘調査報告書」石川県教育委員会
　９　米沢義光・平田天秋　1982「金沢市犀川鉄橋遺跡第１・２次発掘調査報告書」石川県立埋蔵文化財センター
　10　市堀元一・平田天秋　1985「門前町道下元町遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
　11　高堀勝喜編　1983「押水町上田うまばち遺跡」押水町教育委員会

12　出崎政子　1967「北陸地方の縄文時代晩期について（Ⅰ）」『大境』第3号　富山考古学会
13　小島俊彰　1979「本江遺跡」『滑川市史　考古資料編』富山県滑川市
14　垣内光次郎・西野秀和　1985「鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡（II）」石川県立埋蔵文化財センター
15　湯尻修平・吉田裕雪　1977「加賀市横北遺跡発掘調査報告書」石川県教育委員会
16　小島俊彰　1981「井口式土器」『縄文文化の研究』4縄文土器II　雄山閣
17　高堀勝喜　1974「石川県御経塚遺跡」第5次調査概報　野々市町教育委員会
18　高堀勝喜　1983「野々市町御経塚遺跡」野々市町教育委員会

図版1

航　空　写　真　（調査地点）　S=1/8,000 昭和57年8月13日　セントラル航業撮影

井田堂坂遺跡遠景

発掘区近景

表土除去作業風景

上層部の調査風景

上層部の完掘状況

上層部土層断面

下層部の掘り下げ

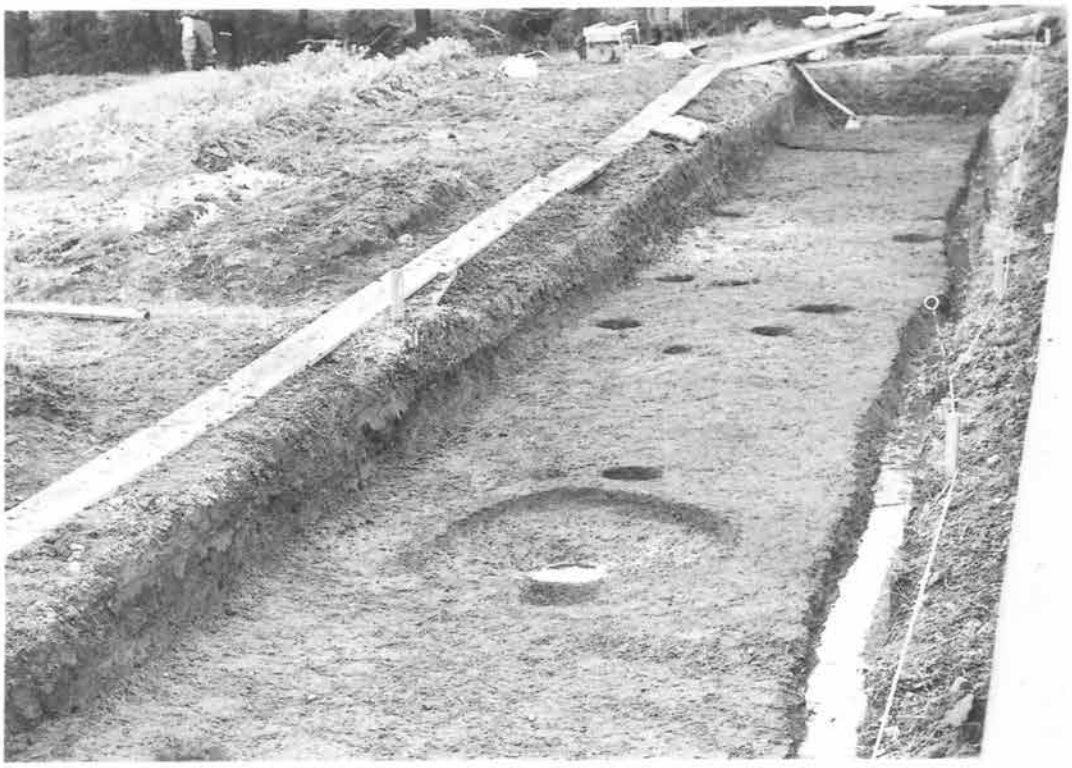
下層部の発掘状況

下層部の土器出土状況

下層部の一括土器

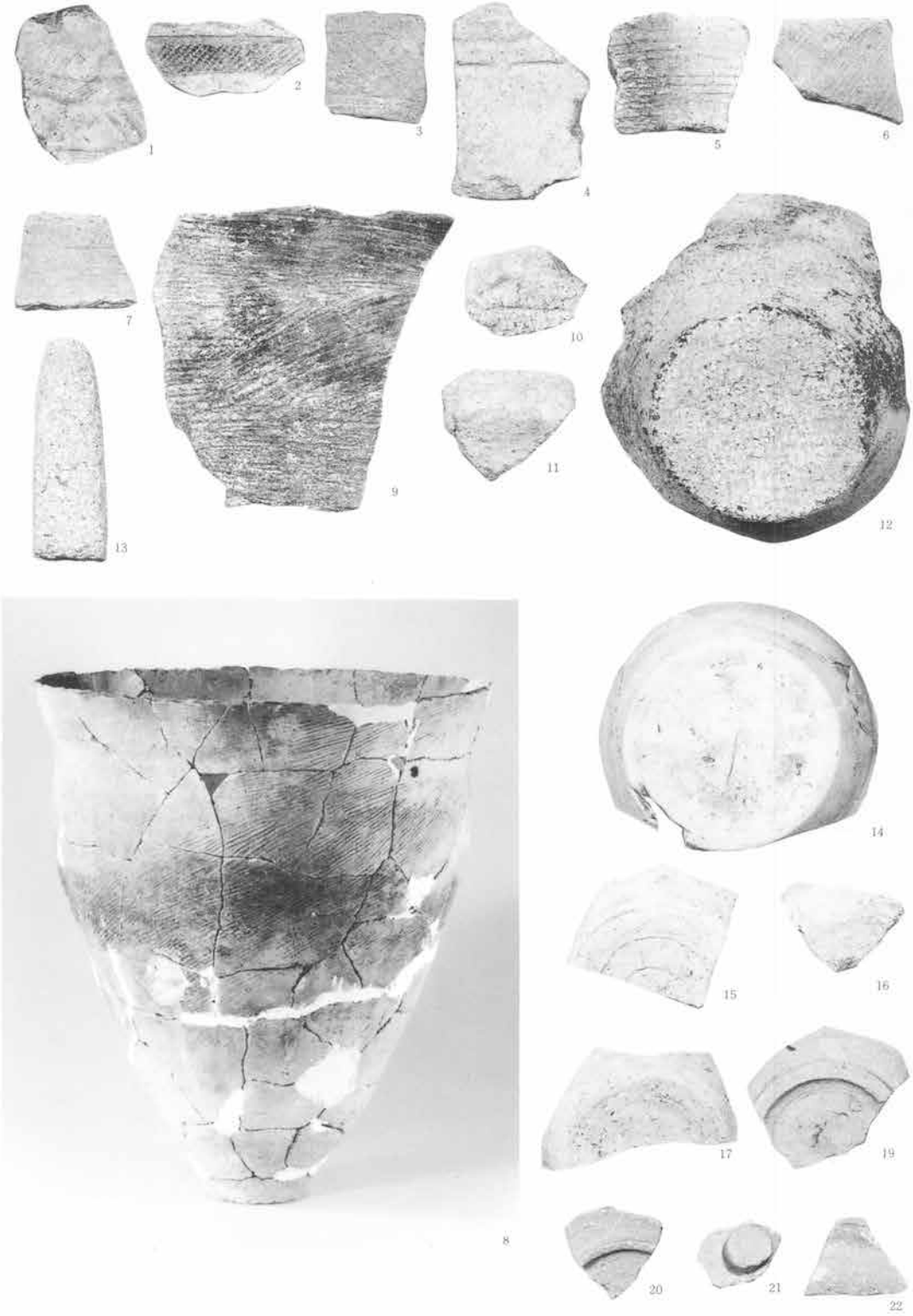
井田テラガイ遺跡近景

南側のピット出土状況

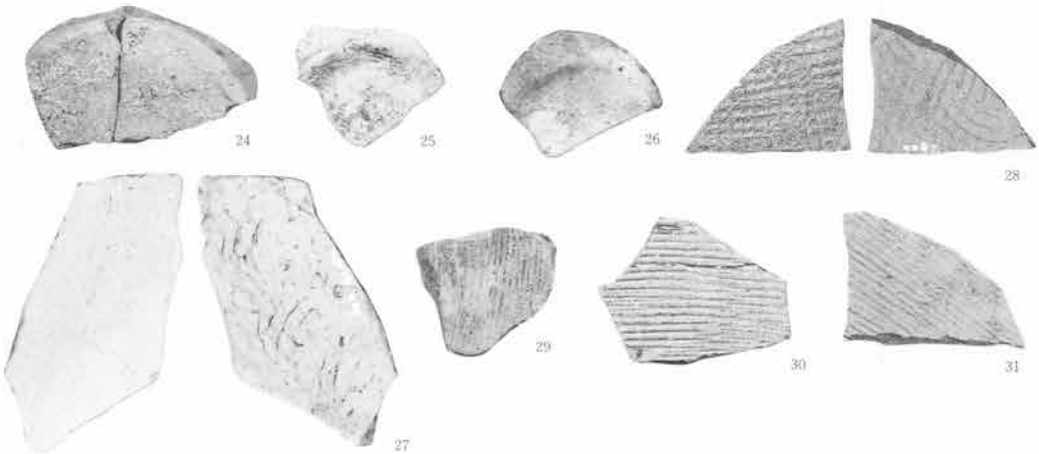


北側のピット出土状況

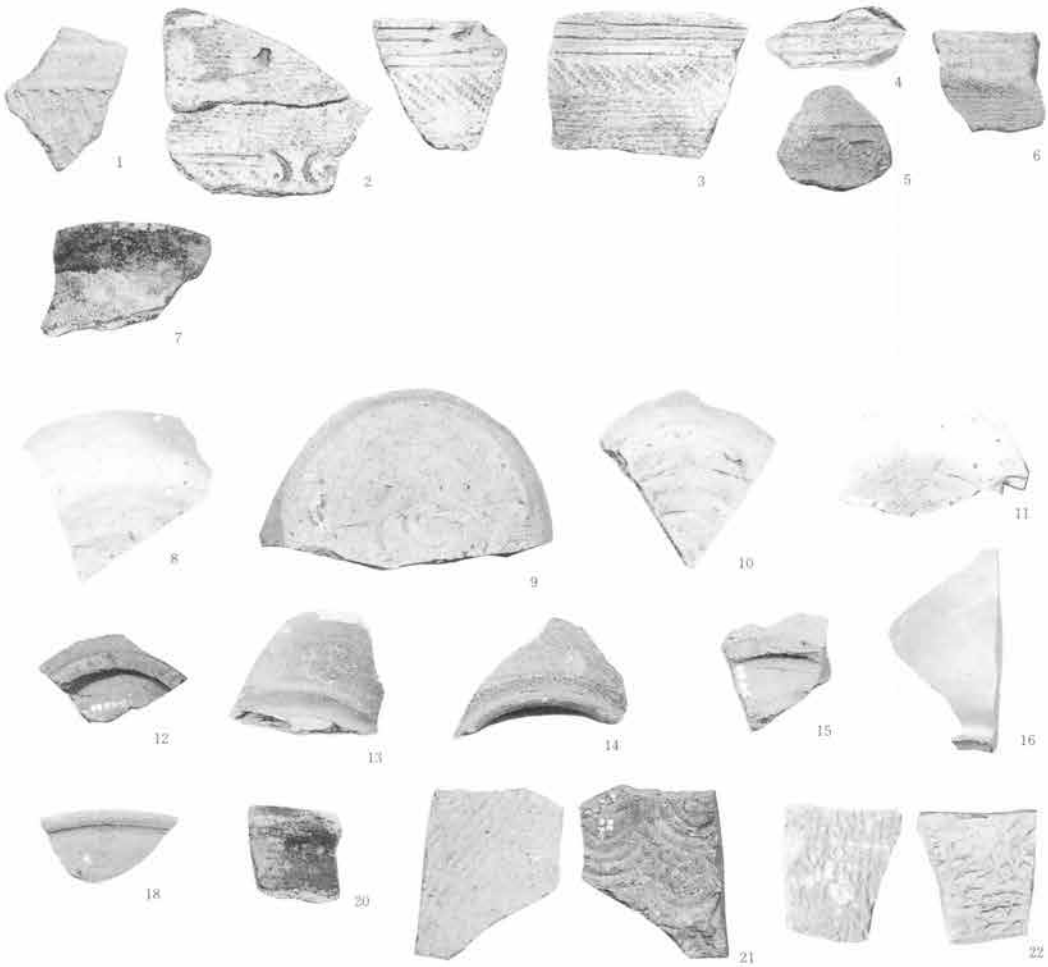
調査区全景



井田堂坂遺跡出土器（8を除いて 1/3）



井田堂坂遺跡出土土器（1/3）



井田テラガイ遺跡出土土器（1/3）

鹿島町井田堂坂遺跡

国道159号井田歩道工事に係る
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

発行日　1986年3月20日（昭和61年）

編集者　石川県立埋蔵文化財センター
発行者　〒921　金沢市米泉4－133

印刷所　㈱　橋本確文堂